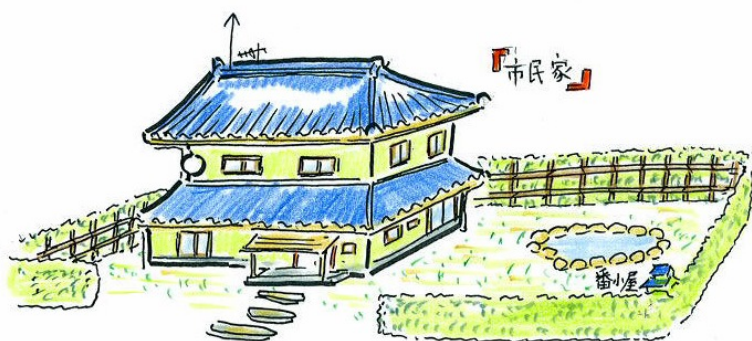


★★ 支援くんの火災予防奮闘記 ★★ これまでのあらすじ

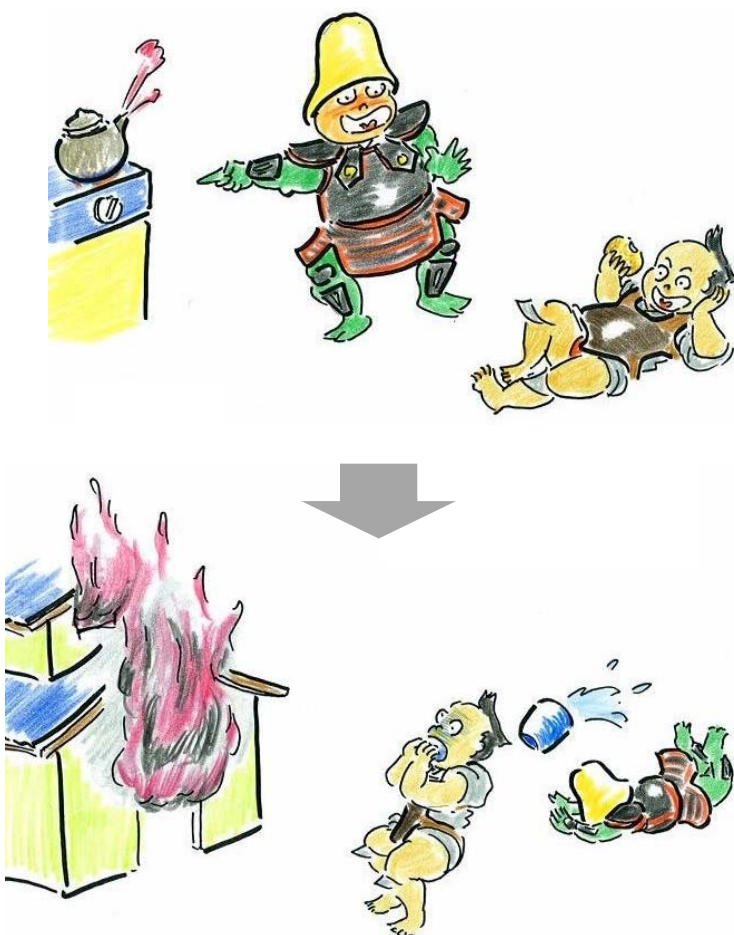
物語を読む前にまずご覧ください。



物語の主人公 支援くんは「市民家」の火災予防を司る妖精です。



家来の^{ちゅうげん}中間 ご助と火災予防の点検を行うのですが、まじめな支援くん比べ、あまり仕事に熱心じゃないご助の点検はいつも問題ばかりで、時に大きな事故まで起きてしまいます。



そんなご助に手を焼きながら、火災の予防を行う支援くんたちの姿は、普通の人には見えない筈なのですが、今年5歳になる市民家の長女 援ちゃん^{えん}には何故か二人の姿が見えるようになったのです。

点得幼稚園^{てんとく}の年中さんの援ちゃんは、二人と遊ぶのがだぁーい好き。

でも、援ちゃんの好奇心が大きな事件を引き起こすこともあります。



ご助と援ちゃんに振り回され、苦勞の絶えない支援くんの

火災予防奮闘記 をどうぞご覧ください。

支援くんの火災予防奮闘記

～火災を起こさないために～

Vol.45

「あーあ、どこかに1万円札でも落ちてねえかなあ。」とお屋敷の点検に疲れ

たご助の気の無い独り言に

「これご助、気の抜けるような独り言を申すでない。あとは洗面所と浴室の点

検で終わりではないか！」と 拙者がたしなめると



「いやいや旦那様、こう暑くっちゃ愚痴も出ようってもんでさ。微々たる給金じゃアイスも買えやしねえ。」と大声で喚くので

「微々たる給金とは何事じゃ。大体がおのれの使い道に問題があるのじゃろうが！毎晩の過ぎたる飲酒に加え、土日、祝日は決まって勝てないネット競馬三昧では給金も無くなろうて！」と叱ると

「す、過ぎたる飲酒とか趣味のネット競馬にまでケチをつけねえでくだせえよ！今月はちょっと調子が悪かっただけでさ。いつもなら・・・」

「いつもならなんじゃ？勝っておるとでも言いたそうじゃが、ほれ、お前のお小遣い帳じゃ。」と懷からご助の机から引っ張り出しておいた帳面を取り出すと

「あっ、あっしの小遣い帳じゃねえでしか！いつの間に！見ないで下せえよ！」と取り繕うご助を振り払い、帳面を開いてみると



「ええと・・・いや汚くて読めんな、^{マイナス}▲5・・・のあとに0が、1, 2, 3, 4, 5と・・・何じゃあ？ ご、50万の借金？ おのれの懐は火の車ではないか！」

と拙者が叫ぶと



「ふ、懐が火の車？ な、なんですかい、あっしの体に火がついてるんですかい？

だ、旦那様、助けてくだせえっ！」と真っ青な顔で拙者にすがりついてきたのじゃ。

「あはははっ、火の車で体に火がついておると？ やっぱりおのれは馬鹿じゃっ

たな！じゃが、この懐具合ではアイスも食えんわな。仕方ない、わしがアイス

を恵んでやる、ついて参れ。」とお屋敷を後に隣地に広がる田んぼの畦道を

主従連なって商店街の方へと向かいましたのじゃ。

しかし、拙者が先ほどのご助の狼狽ぶりを思い出しては腹を抱えて笑うておる

と、ご助の奴め、馬鹿にされたのが余程悔しかったのじゃろう、

「何でえ、チクショー！アイス！個でそんなに笑わなくても良いじゃねえです

かい！」と

拙者に食って掛かってまいりましたのじゃ。

「ひいーひひっ、しかしおのれには笑わされるわい、ひいの車と言うのはな、

お金がなくて困窮しておることを示す言葉じゃ。どうじゃ今のおのれの姿を言

い表しておろうが？」と拙者が笑いながら言いますと

「じょ、冗談じゃねえぜ、人をコケにしやがって！旦那様でも許しやせんぜ！」

と叫ぶと拙者に掴み掛かって来たのじゃ。

じゃが、そこは若い頃、公道館でならした拙者のこと、咄嗟にご助の手を振り

払うと、胸倉を掴み返して足払い一閃、態勢を崩したところを

「えいっ！」とばかり、肩車でご助を畦の上に倒し、

「どうじゃ拙者の肩車の味は？」とご助に語り掛けると



「て、てやんでえ、火の車のあとが肩車だあ？こうなったらあっしも秘密兵器
を出させてもらいやすぜ！」と立ち上がると

「笑ってこらえる血の涙 よるな さわるな 男はひとり あ～あ～あ あ～あ～あ
あ～あ～あ あ～あ～あ 柔道一直線・・・」と一節奏で終え、

「とおおおっ、車周作先生直伝の地獄車あっ、躲せるものなら躲してみやがれ！」
と突進してきたのじゃった。



ご助の気迫に気圧され、「おおおっ?!」と拙者は一、二歩後ずさったのじゃが、突進してきたように見えたご助の体は、畦道の上でつまずき、大きく伸びたかと思うと畦に植えられた大豆の茂みに突っ込んで動かなくなったのじゃった。

「・・・??ど、どうしたのじゃ?」と問いかける拙者に

「だ、誰でえ。こんなところに棒っきれを放り出しておきやがって!」と苦痛に歪んだ泥だらけの顔を上げ、畦に座り込んだご助の手には、先端に藁を括りつけた竹の棒が握られておった。



「おっ、虫追い棒じゃな。そうかもうそんな時季じゃのお。」と目を細めながら拙者がご助の手にした虫追いの棒を見ておると

「む、虫追い・・・棒？ 何ですかいそれは？」と聞いてくるご助に

「うん？虫追いを知らんのか？ ははは、まあ知っておる訳はないわな。どちらかと言えば、おのれは追う方じゃなく追われる方じゃからな。」と拙者がからかうと、

「て、てやんでえ、む、虫追いくらい知ってまさあ。あ、あれでしょ、近しい人が亡くなる寸前にやって来る・・・」

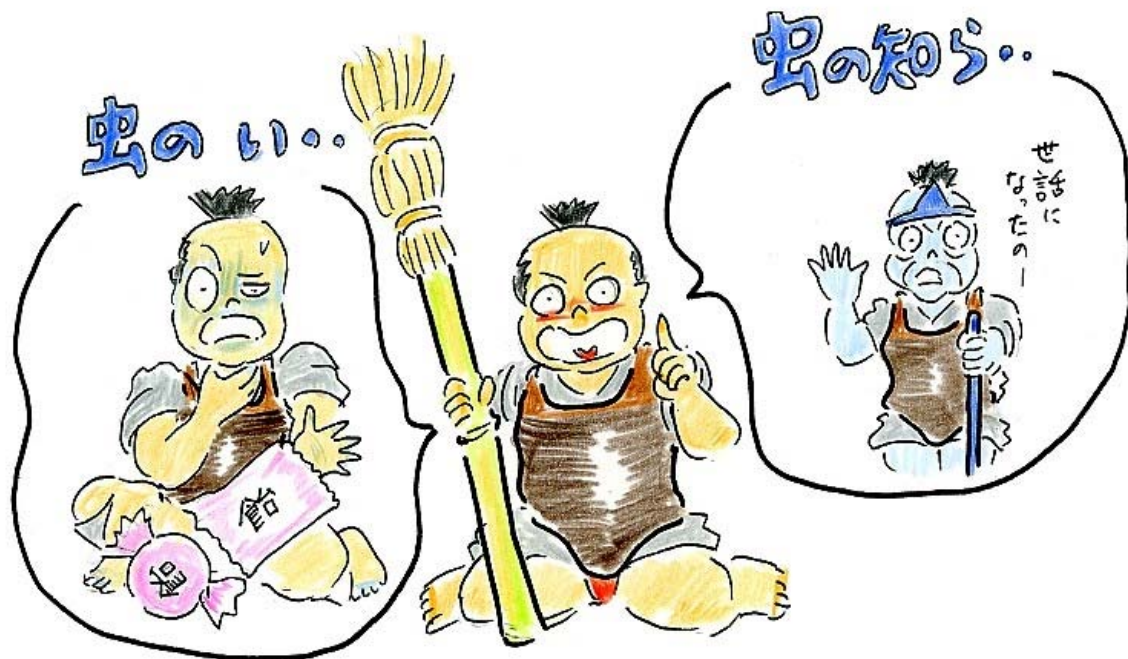
「ばか、それは虫の知らせじゃ。」

「そ、そうでした。そ、それじゃあ、これから悪いことが起きそうな予感が・・・」

「それも虫の知らせ。」

「へへっ、あっ、思い出しました、この前あっしが喉に飴玉を引っかけオツチンじまいそうになった時・・・」

「それは虫の息。馬鹿ばかり言ってないで元に戻しておくのじゃ。今晚辺りこのあたりのお百姓さんが使うのじゃろうからな！」



「へ？百姓がこれを？・・・どうやって？」

「鈍いやっちゃんあ・・・この形状で、虫追いというのに分らんか？」そう
言うと拙者はご助の単衣を首根っこから引っ張ると虫追い棒を背中に差し込んでから

「こうやってな、旗指物のように背中に立てて先端の藁に火を付けてから田ん
ぼを走り回るとな、驚いた虫が逃げるんじゃよ。」と教えたのじゃ



「あ、なあーるほど、そうやるんですかい。旦那様、世の中にはまだまだあっしの知らねえことがあるもんですねえ、勉強になりやす。」と納得したご助が虫追い棒をもとの場所に置くのを見届け、拙者はご助とともにアイスを買求め、番小屋へと帰ったのじゃった。

その夜のこと、夕食を食べ終えた拙者が後片付けしておると、ご助めが拙者の目を盗むようにこっそりと番小屋を出て行きましたな、なにか良からぬことを企んでおるに違いないと、拙者がご助のあとをつけていくと、案の定ご助の奴め鼻歌混じりに

「虫追い、虫追いと、あっしも追われるばかりじゃなく、たまには追う側になりてえからなあ、虫追い棒に火を付けたら旦那様の寝所へ駈け込んで虫のように驚かして追い払ってやらあ。」と言いながら、田んぼへと向かったのじゃった。

(令和6年9月号につづく)